

## 立会い分娩における術前の手術室内見学についての効果

手術室 北川路子 阿部静花 齊藤裕子  
産婦人科 津村宣彦 津村典利

### I. はじめに

現在、立会い分娩という言葉が定着し、それを希望する夫婦が増加している。

近年、帝王切開術における立会い分娩も徐々に普及し、経膈分娩での立ち会い出産と同様に効果的であることが報告されている。

当手術室においても、平成19年12月より産科医師・産科病棟・外来の協力のもと帝王切開術での立会い分娩を開始した。

開始するにあたり、手術室という特殊な環境で立ち会うパートナーに対し、手術室内の見学を行っていたが、これについての評価を行う機会がなく経過していた。

そのため、今回見学前後のアンケート調査とインタビューをパートナーに実施し、手術室内の事前見学が、どのような効果をもたらしているのかを検証・検討したのでここに報告する。

#### <研究目的>

パートナーが、事前に手術室内見学を行う事で立会い分娩にどのような影響をもたらしているのかを評価・検討する

### II. 研究方法

#### 1. 対象者

帝王切開術での立会い分娩を希望される  
パートナー・産婦

#### 2. 研究期間

2008年6月～8月まで

#### 3. アンケート・インタビュー方法

- ・手術室見学前のアンケート及びインタビューをパートナーに実施
- ・立会い分娩の実施後アンケート及びインタビューをパートナー・産婦に実施

#### 4. 研究内容

アンケート項目内容

##### (術前)

- ・事前に手術室内を見学することをどのように思いますか
- ・事前に手術室内を見学するにあたり期待することはどのようなことか

##### (術後)

- ・手術前に手術室を見学し立会い帝王切開術を行って初めての感想
- ・術前の見学・立会い帝王切開術をしてみて気になったことや今後の希望

術前アンケート・インタビューは、パートナーのみに行われ、術後のアンケート・インタビューは、パートナーには術直後に行い、産婦には後日目を改めて実施した。

#### 5. 倫理的配慮

質問用紙は無記名とし、個人が特定できないようにした。

また、調査への参加は自由意志であり、参加の有無による治療や看護上の不利益が生じないことを説明した。

### III. 結果

期間中6例のパートナーに対して、アンケート調査・インタビューを行い、術前手術室内見学が、実施された。

対象者は、6例中5例のパートナー・産婦が、はじめての出産・立会いであり、手術室への入室も6例中4例のパートナー・産婦が、はじめてであった。見学前のパートナーからのアンケート結果では、「普段見る機会がない場所また自分や家族が入る場所なのでよいことだと思う。」「部屋を確認できることが現実を受け止めやすいので良いと思う。」「どんなところで手術するのかわかり安心できる」「事前に知ることにより緊張感が少なくなる」「触れてはいけないものを事前に知ることができる。」などの声が聞かれた。

また、インタビューでは、具体的にはよくわからないが、漠然とした不安の訴えが多かった。

しかし、実際に見学を実施し立会い分娩を行った後には前向きな回答が多く、「事前に見学できて一度でも見て話を聞いていたので普段と変わらなくいられた。」「事前に見学があったのである程度のイメージができたのでよかった。」「事前に説明を受けていたので実際のときはスムーズに行動できた。」などの回答を得ることができた。

また、術後に産婦にもパートナーが、事前に見学することをどのように感じたか？帝王切開術をするにあたっての今後の希望や要望をアンケート・インタビューしたところ「事前に（産婦も）見学しなかった」「もう少し早くに夫に側にいてくれたほうが良い」などの回答・要望を得ることができた。

### IV. 考察

手術室という場所は、一般の人が外来で目にする病院とかけ離れているため、患者・家族に違和感を与え、恐怖や不安を増強することもあるといわれている。

パートナーの心情を考慮すると、子供は無事に産まれるのか、どれくらいで産まれるのか、どんなところで産むのかはパートナーの予測の中でしかなかった。

今回の術前アンケート・インタビュー調査からも手術室に対し、漠然とした不安や恐怖心を抱いていたパートナーが多かった。

慣れない環境やお産というパートナーにとって未知なるイベントに望むことは、想像以上の緊張が

あり、どのように対応するべきか戸惑いが生じていたと考えられる。

そのため、事前にパンフレットを配布し手術当日に手術室内を見学・シュミレーションを行い視覚的・聴覚的に働きかけた。

これにより、事前にどんな場所でどんなスタッフと立会い分娩をおこなうのかということがわかり、具体的に現実的な帝王切開術での立会い分娩のイメージが描きやすくなったと考えられる。

そのため、術後のアンケート・インタビューでも見学前の不安な訴えはなく、前向きな回答を多く得ることができた。

このような発言が聞かれたのは、立会い前にパートナーが、事前情報を得ることが出来た結果と考えられ、入室の準備や手順を予め知らされていると安心感が得られることがわかった。

このため、事前の手術室の見学は、帝王切開術での立会い分娩において、有効であったと考えられる。

また、実際にパートナーが産婦と同じ場所での出産に立ち会うことで、産婦と同じ目線で見れたのではないかと考える。今までは、医療従事者が主体であったものが、今回はパートナーも知識を持って手術に臨める・出産に対して専念できるという点において、良い結果をもたらしたと考える。

見学とは「実地に見て知識を得ること」であり、人間は外界からの情報のおよそ 80%を目から得ているといわれている。

日置は「リアリティのあるプランを作成することで不安が解消できるのではないかと述べている。私たち医療者は、パートナーは父親としての役割を担う存在であり、また妊婦が母親になる為の重要な存在であることを踏まえ、パートナーに対してサポートをする必要があると考えた。

現在、外来受診妊婦の夫への医療者側のかかわりは少なく、夫立会い出産の施設でも両親学級などで、多少関わるも十分ではないといわれている。

立会いをすることで出産を夫婦で共に過ごし、児の出生の瞬間に立会い、児の第一声を夫婦で聞くことにより、親としての自覚や意識が少しでも高められるよい機会となればと考える。

これは、経膈分娩の先行研究においても同様なことが論じられており、立会いの効果というところでは同様であることがわかった。

今回の調査中のインタビューでも 6 例全員が次回の出産が帝王切開術であっても術前の見学・立会い分娩を希望している。

しかし、今回の研究期間中、実際に手術をうける産婦に対しては、事前の手術室の見学については調査出来ていない。

しかし術後、産婦に対してアンケート・インタビューを行ったところ、6 例中全員がパートナーとともに事前見学を望んでいることがわかった。

これは、「ただそばにいてほしい」「夫がそばにいてくれて安心」というアンケート調査から推定すると、何かをしてほしいのではなく、自分のことを一番よくわかっているパートナーとともに同じ時間・空間を共に過ごし、出産を乗り越えたいという思いからの回答であると考えられる。

また、どんなところで出産するのかという願望や

手術に対する不安など、いろいろな面から考えた回答であると感じたため今後の課題となる。

そのため今後は、より良い手術室での立会い分娩を夫婦 2 人で行えるように、術前見学体制を整え実施していきたいと考えている。

## V. 結論

立会い分娩において、パートナーが術前の見学を行いシュミレーションすることは、漠然とした手術・手術室への不安の軽減に効果的である。

## VI. おわりに

今回の研究では、帝王切開術での立会い分娩をするパートナーに対する、術前の手術室内見学についての効果は、明らかにすることができた。今後は、ケース数を重ね夫婦 2 人での見学が、出来るように活動して行こうと考えている。

## VII. 謝辞

本研究をまとめるにあたり、ご協力下さいました産科医師・産科病棟スタッフ・産科外来スタッフ・手術室スタッフの皆様へ深く感謝致します。

## 【参考文献】

- ・ 山田美穂：周産期医学 vol33 no7 2003 7 P887-891 赤山美智代：周産期医学 vol33 no3 2004 3 P363-367
- ・ 末原則幸：周産期医学 vol33 no3 2004 3 P368-370
- ・ 広辞苑
- ・ 武市宏美：立会い分娩前後の父性意識の変化、第 3 5 回 母性看護、P 194, 2004
- ・ 三浦好美・清水ゆかり：夫立会い分娩に関する夫婦の意識の違い、第 3 2 回 母性看護 P11, 2001
- ・ 木村正子：帝王切開分娩が母親に及ぼす影響を心理面から探る、第 3 2 回 母性看護、P61, 2001
- ・ 佐藤真由美：陣痛室夫立会い分娩時の夫婦の感情、第 3 6 回 母性看護、P3, 2005

## 【引用文献】

- ・ 武市宏美：立会い分娩前後の父性意識の変化、35 回 母性看護、P192, 2004
- ・ 日置千華子：バースプランを書いてもらおう 5 助産師のケアとバースプラン、ペリネイタルケア 21 (12) p 1034-1038. 2002